20030743

厚生労働科学研究費補助金

こころの健康科学研究事業

人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究

平成１５年度　総括・分担研究報告書

主任研究者　北村　俊則

平成１６年３月

目次

Ⅰ．総括研究報告

人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究　1
北村　俊則，吉川　武彦，伊藤　順一郎，大渕　憲一

Ⅱ．分担研究報告

１．アタッチメント・スタイルとパーソナリティ，被養育体験，および性行動、・性意識との関連に関する研究　4
松岡　奈緒，岸田　泰子，宇治　雅代，鹿井　典子，陳　孜，平村　英寿，北村　俊則

２．Parental Bonding Instrument (PBI) の確認的因子分析による因子モデルの検討，および育児様式の世代間伝播について　13
宇治　雅代，庄野　昌博，北村　俊則

３．パーソナリティと養育環境に関する研究　36
鹿井　典子，宇治　雅代，陳　孜，平村　英寿，松岡　奈緒，北村　俊則

４．児のパーソナリティおよび親のパーソナリティと養育態度についての研究　42
平村　英寿，宇治　雅代，鹿井　典子，陳　孜，松岡　奈緒，北村　俊則

５．青年期の対人的怒り感情―連日電話インタビュー法による研究―　50
大渕　憲一

６．思春期の危険な性行動を規定する心理社会的要因　60
陳　孜，岸田　泰子，松岡　奈緒，宇治　雅代，鹿井　典子，平村　英寿，北村　俊則

７．不登校からひきこもりへの遷延化と転帰に関する研究　67
堀内　健太郎，吉田　光爾，小林　清香，野口　博文

Ⅲ．参考資料

子育てとお子様のメンタルヘルスに関するアンケート　父親用　80
子育てとお子様のメンタルヘルスに関するアンケート　お子様用　96

厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）研究報告書

人間関係の希薄化がもたらした精神保健問題に関する研究

主任研究者
北村　俊則　　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
分担研究者
吉川　武彦　　国立精神・神経センター精神保健研究所
伊藤順一郎　　国立精神・神経センター精神保健研究所社会復帰相談部
大渕　憲一　　東北大学大学院文学研究科

研究要旨

人間関係の希薄化がもたらしたと考えられ，社会問題となったような精神保健問題について基礎研究を行った．その結果，今回調査対象人口において，親から受けた望ましい養育—高ケア・低過干渉—が望ましいパーソナリティの形成に寄与していた。外に向く問題行動（怒りの感情，非行的行動，攻撃的行動，危険な性行動）は，周囲の環境，パーソナリティ，被養育体験で規定されていた．思春期の重要他者との親密な関係がそれまでの生育環境と本人のパーソナリティに規定され，性意識・性行動を良好にしていた．

A．研究目的

人間は社会的生物であり，単に身体的・生物学的に生存するために居住する他の人間と共存するコミュニティーを必要とする．しかし，社会構造の変化に伴い，かつては存在した支持的人間関係が親子関係，家庭，職場，地域で希薄化してきているという指摘がなされている．ことに親子関係の変化は著しいものがある．そしてこうした変化に伴って心理・行動上の問題が多数現れる．本研究は問題行動を (1) 外に向く問題行動（怒りの感情，攻撃的行動，性的逸脱行為）と (2) 内に向く問題行動（引きこもり，自殺念慮や自傷行為，抑うつ・不安）に分け，人間関係の希薄化が青年期のパーソナリティ形成 — 気質（temperament），性格（character），対処行動（coping behaviour），防衛スタイル（defense style）— の変化を通じて，あるいは直接に問題行動に影響していると仮設を立てた（図１）．

B．研究方法及び研究成果

本研究の各分担課題は主として疫学的手法を用い，調査票はすべて匿名にするなどして倫理面への配慮をおこなった．

<u>パーソナリティ形成にかかわる幼少期体験についての研究</u>

親の養育態度は Parental Bonding Instrument (PBI) で評価した．PBI にはケア（care）と過干渉（overprotection）という２つの下位尺度があり，高いケアと低い過干渉が適切な養育環境であるといわれている．

10 歳～15 歳：800 家庭の同様の調査では，父母（特に母親）が高ケアと低過干渉を示すほどその子において望ましい気質（低い新規追求，高い報酬依存，高い持続）と望ましい性格（自己指向，協調，自己超越）が多く観察された．

18 歳～25 歳：4000 名の大学生を対象とした調査では，男子学生・女子学生ともに，母の高ケア低過干渉が報酬依存を高め，父の高ケアが自己超越を高め，父の低過干渉が自己指向を高めていた．

<u>外に向く問題行動</u>

攻撃的行動：10 歳～15 歳の男女の攻撃的行動を Child Behavior Checklist (CBCL; Achenbach ら，1983) の外向性問題行動評価—非行的行動と攻撃的行動—で測定した．児の非行的行動は児の気質と父の養育態度で予測できた．児の攻撃的行動は父の低過干渉で予測できた．

危険な性行動：青年期の男女における危険な性行動（複数の特定のパートナーあるいは不特定のパートナーと関係を持っており，かつ避妊をほとんど行わないあるいは行ったことがない）を 2000

名の大学生を対象にして調査した．危険な性行動は学生の 15%～17%に認められた．男女とも新奇性追求が高いほど危険な性行動をする傾向にあった．さらに，損害回避と持続の低い女性のほうが危険な性行動をする傾向にあった．

内に向く問題行動

人間関係の希薄化

本人の性格（特に自己指向と協調）と気質（特に損害回避と報酬依存）がのぞましいものほどアダルト・アタッチメントが良好であった．

アダルト・アタッチメントと異性関係：安定したアタッチメントスタイルを持つ者は，青年期におけるアタッチメントの対象となりうる恋人との間で，より親密で安定した性的関係と性意識を継続できていた．

被養育体験

知覚された被養育体験の構造：人生早期にどのような養育を受けたかが以降のパーソナリティの形成や問題行動の出現に関与していることが明らかになった．そこで，PBI の因子構造を再検討し，養育する側の性別や養育される側の性別によって影響を受けただけではなく，養育を受ける側の世代が親であるか子どもであるかによって影響を受けるものであることを明らかにし，子どもの発達が因子構造に影響を与えていると結論した．

C．結論

今回調査対象人口において，親から受けた望ましい養育—高ケア・低過干渉—が望ましいパーソナリティの形成に寄与していた．

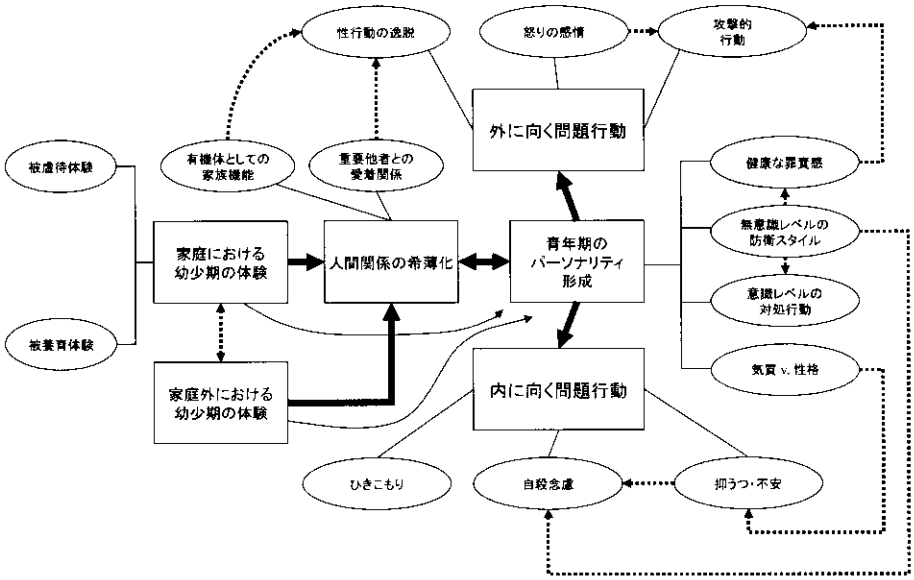
外に向く問題行動（怒りの感情，非行的行動，攻撃的行動，危険な性行動）は，周囲の環境，パーソナリティ，被養育体験で規定されていた．

思春期の重要他者との親密な関係がそれまでの生育環境と本人のパーソナリティに規定され，性意識・性行動を良好にしていた．

D．健康危険情報

なし

モデル図


性行動の逸脱
怒りの感情
攻撃的
行動
外に向く問題行動
被虐待体験
有機体としての
家族機能
重要他者との
愛着関係
健康な罪責感
無意識レベルの
防衛スタイル
家庭における
幼少期の体験
人間関係の希薄化
青年期の
パーソナリティ
形成
意識レベルの
対処行動
被養育体験
気質 v. 性格
家庭外における
幼少期の体験
内に向く問題行動
ひきこもり
自殺念慮
抑うつ・不安

厚生科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）

研究協力報告書

アタッチメント・スタイルとパーソナリティ，被養育体験，および性行動・性意識との関連に関する研究

研究協力者

松岡　奈緒　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
岸田　泰子　島根医科大学
宇治　雅代　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
鹿井　典子　熊本大学大学院医学薬学研究部講座臨床行動科学分野
陳　　孜　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野
平村　英寿　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野

主任研究者

北村　俊則　熊本大学大学院医学薬学研究部臨床行動科学分野

研究要旨

青年期におけるアタッチメント・スタイルとパーソナリティ，被養育体験，および性行動・性意識との関係を調査するために，全国 615 校の 4 年制大学に調査協力依頼をし，110 大学へ調査票を配布した．有効回答のうち 23 歳以下の未婚者を調査の対象とした．

アタッチメント・スタイルとパーソナリティ，親の養育態度との関係を調査した結果，女性においては，その父親と母親がともに豊かなケアを心がけることが安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となることが明らかとなった．また，母親の過干渉は逆にアタッチメント・スタイルを不安定なものにしてしまうようであった．

父親の豊かなケアは娘の Reward Dependence (RD)，Cooperativeness (C)，Self-Transcendence (ST)に影響を及ぼし，その結果この 3 つの性質は secure なアタッチメント・スタイルを形成する要素となっていた．一方，母親の過干渉さは，娘の Self-Directedness (SD) や C を低め，Harm Avoidance (HA) を高めていた．アタッチメントと Temperament and Character Inventory (TCI) の関係をみると，高 SD，高 C，高 RD，低 HA が secure なアタッチメント・スタイルを形成する要素となっていることから，母親の過干渉さが，娘のアタッチメント・スタイルを安定させる要素となりうる気質や性格に影響を及ぼし，その結果 insecure なアタッチメント・スタイルが形成されることが考えられた．次に，男性においては，父親の豊かなケアが安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となることが明らかになった．また，母親の過干渉さがアタッチメント・スタイルを不安定なものにしてしまう可能性が示唆された．また，男性の場合，高 RD，高 SD，高 C，低 HA が安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となっているが，父親の過干渉が SD と C を低める方向に寄与していることから，父親の過干渉さは，直接アタッチメント・スタイルには影響しないものの息子の気質や性格に影響を及ぼし，ひいてはそれがアタッチメント・スタイルに影響することが予測できる．

アタッチメント・スタイルが影響を及ぼすと考えられる心理的適応の 1 つの表現として性意識・性行動においては，安定したアタッチメント・スタイルを持つ者は，青年期におけるアタッチメントの対象となりうる恋人との間で，より親密で安定した関係を継続できていた．

A．研究目的

アタッチメントとは Bowlby (1958, 1977) によれば，人が特定他者に ― 特に新生児がその親に ― 持つ強い情緒的絆である．アタッチメントは主に新生児期に，その親に対して生じ，次いで，そのアタッチメントによって自己と他者についての表象 (internal working model) が形成される．Bowlby

は，この internal working model が成人期まで持続し，成人期の対人関係のとり方や精神病理に影響していると推測した．Bowlby の仮説に従うならば，青年期においてもアタッチメント・スタイルを確認することができ，その安定あるいは不安定さが，心理的適応に何らかの影響を及ぼしていることが推測される．また，アタッチメントは新生児期の親との間で主に形成されることから，青年期のアタッチメント・スタイルを規定する要因としてパーソナリティ，親の養育態度が考えられる．

そこで本研究は，まず初めにアタッチメント・スタイルと (1)パーソナリティ，(2)親の養育態度との関係を調査し，続いてアタッチメント・スタイルが影響を及ぼすと考えられる心理的適応の１つの表現として(3)性意識・性行動についても合わせて検討することを目的とした．

B．研究方法

対象

4 年制大学に通う大学生を対象とした．回収数は 4,289 部（回収率 12.7%）で，うち有効回答数 4,224 部（男性 1,330，女性 2,894）であった．有効回答のあった 4,224 名のうち，既婚者 24 名は分析対象から除外した．また青年期を対象としていることから年齢に制限を加え，本研究では 23 歳以下の者を分析の対象とし，以後の分析は 3912 名（男性 1,149，女性 2,763）で行うこととした．男性の年齢平均は 20.1 歳，女性の年齢平均は 20.0 歳であった．

方法

全国 615 校の 4 年制大学学長宛に各大学学生への調査依頼文書を送り，協力同意の得られた 110 大学(18%)へ大学ごとに配布可能な数の調査票（総計 33,799 名分）を発送した．調査票の配布については，各大学に一任し，授業時，健康診断時，大学祭の講演時に配布されるかもしくは学生課，健康管理センター，保健室へ設置されるなどの方法がとられた．調査は無記名自己記入式アンケートを用いて行われ，参加はあくまでも学生の自由意志によるものであるよう依頼し，その説明は各大学に依頼すると同時に調査票の表書きに文書で記した．調査票の回収は学生個人から調査者へ料金受取人払いでの直接郵送法の形をとった．

尺度

1．属性

属性として，年齢，性別，専攻，現在の生活スタイル，結婚の有無を尋ねた．

2．青年期におけるアタッチメント

成人のアタッチメントを測定する種々の実証的手法のなかから Bartholomew ら (1991) の Relationship Questionnaire (RQ) を使用した．Bowlby (1977) の臨床的考察を実証的尺度に『翻訳』した Bortholomew ら (1991) は，アダルト・アタッチメント・スタイルを，secure（自己と他者の双方に positive なスタイル），fearful（自己と他者の双方に negative なスタイル），preoccupied（他者には positive であるが自己には negative なスタイル），dismissing（自己には positive であるが他者には negative なスタイル） の４つに分けている．尺度は４つのアタッチメント・スタイルについて，それぞれどの程度自分に当てはまるかについて「全く私に当てはまらない」から「非常に私に当てはまる」までの 7 件法を用いて回答を求めるものである．我々は著者より翻訳許可を得た上で RQ を翻訳し本研究に用いることとした．

３．パーソナリティ

パーソナリティを測定する尺度として Temperament and Character Inventory (TCI; Cloninger ら 1993) を用いた．TCI は Cloninger ら (1993) の気質 Temperament と性格 Character の 7 次元モデルを測定するために編集された自己記入式調査用紙である．TCI は気質と性格から構成され，気質には新奇性追求 novelty seeking (NS)，損害回避 harm avoidance (HA)，報酬依存 reward dependence (RD)，持続 persistence (P)，の 4 つの下位尺度がある．性格には，自己指向 self-directedness (SD)，協調性 cooperativeness (C)，自己超越性 self-transcendence (ST) の３つの下位尺度が設定されている．日本語版 TCI は原著者の許可を得て木島ら (1996) が作成し，その信頼性・妥当性については Kijima ら (2000) および Tomita ら (2000) の報告がある．今回の調査では Kitamura ら (1999) の調査結果をもとに，下記 TCI 日本語版の中から下位尺度得点と相関係数の高い NS 3 項目，HA 3 項目，RD 3 項目，P 2 項目，SD 3 項目，C 3 項目，ST 3 項目による短縮版を作成し，回答は「はい」「いいえ」の 2 件法を用いた．今回の被験者においても各下位尺度と各項目との相関係数はいずれも高い相関が認められた（ NS 0.69-0.72, HA 0.64-0.73, RD 0.63-0.78, P 0.83-0.85, SD 0.67-0.78, C 0.56-0.69 ST 0.61-0.71).

４．被養育体験

被養育体験を測定する尺度として Parental Bonding Instrument (PBI) (Parker ら, 1979) を用いた. PBIは15歳以前の父および母から受けた養育を遡及的に評価させる 25 項目からなる自己評価尺度である. 日本語訳は鈴木ら (北村, 1998) が行い, その妥当性を Kitamura ら(1993) が報告している. PBI の下位尺度は, 親の愛情を評価するケア care 得点と, 過保護・過干渉を評価する過干渉 over-protection 得点とが用意されている. PBI は, 両親や同胞による他者評価と高い一致率を示すことから, 養育行動の回顧的確認を意味するだけでなく, 実際の養育行動を反映したものである可能性が示唆されている (Parker, 1989) . また PBI は, Parker (1979) が再検査法によって高い信頼性を確認している. 本研究の被験者における内的整合性 (α 係数) は父のケア得点 0.90, 父の過干渉得点 0.83, 母のケア得点 0.89, 母の過干渉得点 0.86 であった.

5. 性意識・性行動

青年期の性意識・性行動として, (1)性交経験の有無, (2)初交年齢, (3)初交の相手とその年齢, (4)初交は合意か否か, (5)現在の性的パートナーの有無, (6)過去の性交頻度, (7)最近の性交頻度, (8)避妊の知識, (9)避妊頻度と使用する避妊方法, (10)本人もしくはパートナーの妊娠暦, (11)人工妊娠中絶に関する意見, (12)援助交際に対する意見, 等を尋ねた.

解析

解析は SPSS 11.0を用いて行った. アタッチメント・スタイルの因子構造を確認後, アタッチメント・スタイルを基準変数としパーソナリティ, 親の養育態度, 性意識・性行動を説明変数として分析を行った.

C. 研究結果

1. アタッチメント・スタイルの因子分析

因子分析の結果, アタッチメント・スタイルは 1 因子構造をしていることが明らかとなった (表 1). そのため, 本研究において新たにアタッチメントの合成得点を作成した. この得点が高いほど insecure なアタッチメント・スタイルを示す.

アタッチメント・スタイル得点= (fearful 得点) + (preoccupied 得点) + (dismissing 得点) − (secure 得点)

表 1 アタッチメント・スタイルの因子分析

Attachment style	因子負荷量
Secure	−.397
Fearful	.694
Preoccupied	.421
Dismissing	.399

2. アタッチメント・スタイルの性差

t 検定の結果, 男女間で差がみられ, 男性 (mean 5.45 SD4.64) が女性 (mean 5.14 SD 4.49) よりも insecure なアタッチメント・スタイルを持つ者が多いことが明らかとなった ($P<.05$). そこで, 以降の分析をそれぞれ男女別に行うこととした.

3. アタッチメントとパーソナリティ

男性のアタッチメント・スタイルは, RD ($P<.001$), SD ($P<.01$), C ($P<.001$), ST ($P<.05$) と負の相関がみられ, HA ($P<.001$) とのみ正の相関がみられた(表 2). 言い換えると, RD, SD, C, ST が高く, HA が低い者ほど secure なアタッチメント・スタイルを示す.

女性のアタッチメント・スタイルは, NS ($P<.05$), RD ($P<.001$), SD ($P<.001$), C ($P<.001$), ST ($P<.001$) と負の相関がみられ, HA ($P<.001$)とのみ正の相関がみられた(表 2). 言い換えると, NS, RD, SD, C, ST が高く, HA が低い者ほど secure なアタッチメント・スタイルを示す.

4. アタッチメント・スタイルと被養育体験

男女ともに, 父親のケア得点 (Fcare)・父親の過干渉得点 (Fprot), 母親のケア得点 (Mcare)・母親の過干渉得点 (Mcare)との相関がみられた. 父母のケア得点が高いほど secure なアタッチメント・スタイルを示していた. 一方, 過干渉得点に関しては, 男性の場合父母の過干渉得点が高いほど secure なアタッチメント・スタイルを示すのに対し, 女性は父母の過干渉得点が低いほど secure なアタッチメント・スタイルを示すことが明らかとなった.

表 2 男女のアタッチメント・スタイルと TCI・PBI との相関

	男性	女性
TCI		
NS	−.05	−.05*
HA	.19***	.19***
RD	−.14***	−.10***
P	−.05	−.03
SD	−.09**	−.15***
C	−.25***	−.16***
ST	−.08*	−.13***
PBI		

Fcare	−.19***	−.20***
Fprot	−.16***	.11***
Mcare	−.18***	−.21***
Mprot	−.21***	.15***

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

5．TCI によるアタッチメントの予測

男女別にアタッチメント・スタイルを従属変数とし，TCI の下位尺度を説明変数として直接投入法による重回帰分析を行った（表3）．その際，まず年齢を先に投入し，その後 TCI の性格下位尺度，そして気質下位尺度を投入する方法をとった．

その結果，男女ともに高 SD，高 C，高 RD，低 HA が secure なアタッチメント・スタイルを形成する方向に寄与し，さらに女性についてのみ高 ST が secure なアタッチメント・スタイルを形成する方向に寄与していた．

表 3　TCI とアタッチメント・スタイルの重回帰分析

		男性				女性			
	Variables	R^2	ΔR^2	β		R^2	ΔR^2	β	
Age		.000	.000	.017	.569	.002	.002**	−.035	.062
TCI									
	Character	.066	.066***			.062	.060***		
SD				−.089**	.004			−.160***	.000
C				−.188***	.000			−.103***	.000
ST				−.008	.792			−.090***	.000
Temperament		.106	.040***			.096	.035***		
NS				−.052	.088			−.031	.125
HA				.168***	.000			.157***	.000
RD				−.127***	.000			−.119***	.000
P				−.018	.553			−.001	.944

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

6．PBI によるアタッチメント・スタイルの予測

男女別にアタッチメント・スタイルを従属変数とし，PBI の下位尺度を説明変数として直接投入法による重回帰分析を行った（表4）．その際，まず年齢を先に投入し，その後 PBI の下位尺度を投入する方法をとった．

その結果，男女ともに父親のケア得点が secure なアタッチメント・スタイルを形成する方向に寄与していた．また，女性においてのみ母親のケア得点も secure なアタッチメント・スタイルを形成する方向に寄与していた．一方で，男女ともに母親の過干渉得点は insecure なアタッチメント・スタイルを形成する方向に寄与していることが明らかとなったが，父の過干渉得点は男女ともに青年のアタッチメント・スタイルに寄与していなかった．

表 4　PBI とアタッチメント・スタイルの重回帰分析

	男性				女性			
Variables	R^2	ΔR^2	β		R^2	ΔR^2	β	
Age	.000	.000	.006	.840	.002	.002**	−.045*	.019
PBI	.066	.066***			.066	.064***		
Fcare			−.112**	.003			−.135***	.000
Fprot			.025	.508			.024	.318
Mcare			−.057	.135			−.123***	.000
Mprot			.138***	.000			.052*	.043

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

7．PBI による TCI の予測

男女別に TCI の下位尺度を従属変数とし，PBI の下

位尺度を説明変数として直接投入法による重回帰分析を行った(表5). その際, まず年齢を先に投入し, その後 PBI の下位尺度を投入する方法をとった.

その結果, 父親のケア得点は, 男女ともに ST を高くする方向に寄与していた. また, 男性においてのみ父親のケア得点の高さが, NS を低下させる方向に寄与していた. 一方女性では, 父親のケア得点は, RD, P, C をそれぞれ高める方向に寄与していることが明らかとなった. 次に, 父親の過干渉得点は, 男女ともに SD を低くする方向に寄与していた. また, 男性においてのみ父親の過干渉得点は C を低くする方向に寄与していた. 一方女性では父親の過干渉得点は RD を高める方向に寄与していることが明らかとなった.

母親のケア得点は, 男女ともに RD を高める方向にのみ寄与していた. 母親の過干渉得点は男女ともに RD を高める方向に寄与していた. また, 女性においてのみ母親の過干渉得点は HA を高め, SD, C を低める方向に寄与していることが明らかとなった.

表 5　PBI と TCI の重回帰分析

男性	NS	HA	RD	P	SD	C	ST
Age	-.068*	-.111***	.042	-.009	-.066	.027	.087**
PBI							
Fcare	-.114**	-.071	.042	.049	-.045	.031	.127**
Fprot	.029	.002	.000	.014	-.129**	-.087*	.070
Mcare	.047	.058	.178***	.013	-.034	.071	.056
Mprot	.015	.065	.088*	-.065	-.023	.013	.064
Adjusted Total R^2	.014**	.008	.031***	.009	.016**	.020***	.021***

女性	NS	HA	RD	P	SD	C	ST
Age	.007	-.043*	.024	.049*	.038	-.043*	-.020
PBI							
Fcare	-.005	-.044	.083***	.074**	.006	.049*	.059*
Fprot	.020	.029	.049*	.009	-.103***	-.045	.023
Mcare	-.010	.031	.141***	.023	-.025	.031	.043
Mprot	.026	.070**	.111***	-.029	-.065*	-.060*	.051
Adjusted Total R^2	.002	.010***	.032***	.009***	.021***	.019***	.007**

値は標準化 β と, その有意水準 (*P<.05; **P<.01; ***P<.001)

8．アタッチメントと性意識・性行動

解析では, まず性交経験の有無とアタッチメント・スタイルとの関連について検討し, 次いで, 性交経験者について, (1)性交経験の有無, (2)初交は合意か否か, (3)現在の性的パートナーの有無, (4)最近の性交頻度, (5)人工妊娠中絶を認める場合の理由に関する賛否, (6)援助交際に対する意見とアタッチメント・スタイルとの関連を検討した.

1）男性における性意識・性行動とアタッチメント・スタイルとの関係

表 6　男性のアタッチメント・スタイルと性行動・性意識（t 検定）

セックス経験	**経験者平均値（SD）**	**未経験者平均値（SD）**	**t 値**
	4.56 (4.42)	6.90 (4.63)	-8.37***
セックスの合意	**合意（SD）**	**非合意（SD）**	
	4.53 (4.43)	6.38 (3.66)	-1.17
中絶に対する意見	**賛成（SD）**	**反対（SD）**	
経済的理由	5.68 (4.84)	5.30 (4.45)	-1.30
母体の健康を損なう	5.43 (4.71)	5.48 (4.43)	.185
仕事や学業に支障	5.62 (4.97)	5.39 (4.48)	-.676

妊娠した女性1人の希望	6.37 (5.15)	5.20 (4.42)	-3.14**
女性とそのパートナーの希望	5.50 (4.75)	5.37 (4.38)	-.47
胎児に異常	6.08	5.16	-2.84**
行うべきではない	5.39	5.45	.154

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

表7　男性のアタッチメント・スタイルと性行動・性意識（1要因分散分析）

	平均	SD	F比
特定のパートナーの有無			
特定のパートナー1人(A1)	4.01	4.29	4.49**
複数の特定パートナー(A2)	4.69	5.00	A1<A4
不特定のパートナー(A3)	5.22	4.29	
いない(A4)	5.31	4.44	
最近のセックスの頻度			
ほとんど毎日(B1)	5.93	4.68	2.11*
2—3日に1度(B2)	4.16	4.72	B3<B8
1週間に1度(B3)	3.67	4.16	
2—3週間に1度(B4)	4.61	4.24	
1ヶ月に1度(B5)	4.56	4.03	
2—3ヶ月に1度(B6)	4.22	4.37	
1年に数回以下(B7)	4.61	4.08	
まったくない(B8)	5.48	4.74	
援助交際の有無			
経験したことがある(C1)	5.90	3.96	0.78
チャンスがあればしたい(C2)	5.85	4.93	
認めるべきではない(C3)	5.20	4.71	
知っているが関心がない(C4)	5.54	4.54	
知らない(C5)	6.35	4.37	

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

(1)t検定の結果，セックス経験者（mean 4.56 SD 4.42）と未経験者（mean 6.90 SD 4.63）の間で有意差がみられ，未経験者の方が insecure なアタッチメント・スタイルを持つ者が多いことが明らかとなった(P<.001).

(2)1要因分散分析の結果，特定のパートナーを1人だけ持つ者（mean 4.01 SD 4.29）と比べて，特定のパートナーが存在しない者（mean 5.31 SD 4.44）の方が insecure なアタッチメント・スタイルを示す者が多い(P<.01).

(3)1要因分散分析の結果，最近のセックスの頻度において，週に1度のセックスを経験する者（mean 3.67 SD 4.16）にくらべ，全くセックスを行わない者（mean 5.48 SD 4.74）の方が insecure なアタッチメント・スタイルを持つ者が多い(P<.05).

(4)t検定の結果，中絶に対する意見において，「女性が望むのであればその女性一人の希望によって中絶しても良い」（mean 6.37 SD 5.15）「胎児に異常が認められるならば中絶しても良い」（mean 6.08 SD 5.11）という意見をもつ者は，この意見に反対する者（mean 5.20 SD 4.42，mean 5.16 SD 4.33）より insecure なアタッチメント・スタイルを示すことが明らかとなった(P<.01).

2）女性における性意識・性行動とアタッチメント・スタイルとの関係

表8　女性のアタッチメント・スタイルと性行動・性意識（t検定）

セックス経験	経験者平均値（SD）	未経験者平均値（SD）	t値
	4.47 (4.49)	6.04 (4.38)	-8.97***
セックスの合意	**合意（SD）**	**非合意（SD）**	
	4.44 (4.46)	5.74 (4.68)	-2.03*
中絶に対する意見	**賛成（SD）**	**反対（SD）**	
経済的理由	5.12 (4.54)	5.20 (4.56)	-.018
母体の健康を損なう	5.08 (4.49)	5.29 (4.50)	.961
仕事や学業に支障	5.11 (4.57)	5.13 (4.46)	.116
妊娠した女性1人の希望	5.60 (4.83)	4.98 (4.38)	-2.86**
女性とそのパートナーの希望	5.13 (4.49)	5.11 (4.50)	-.105
胎児に異常	5.18 (4.58)	5.10 (4.45)	-.479
行うべきではない	4.72 (4.25)	5.15 (4.51)	1.25

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

表9　女性のアタッチメント・スタイルと性行動・性意識（1要因分散分析）

	平均	SD	F比
特定のパートナーの有無			
特定のパートナー1人(A1)	4.18	4.44	6.29***
複数の特定パートナー(A2)	4.84	5.13	A1<A4
不特定のパートナー(A3)	5.75	3.25	
いない(A4)	5.28	4.48	
最近のセックスの頻度			
ほとんど毎日(B1)	4.49	4.69	3.22**
2—3日に1度(B2)	4.44	4.71	B3<B8
1週間に1度(B3)	3.83	4.37	
2—3週間に1度(B4)	4.69	4.49	
1ヶ月に1度(B5)	4.10	4.40	
2—3ヶ月に1度(B6)	4.66	3.88	
1年に数回以下(B7)	5.45	4.39	
まったくない(B8)	5.27	4.52	
援助交際の有無			
経験したことがある(C1)	5.41	4.49	6.30***
チャンスがあればしたい(C2)	6.35	4.60	C2>C3 C3<C4
認めるべきではない(C3)	4.71	4.42	
知っているが関心がない(C4)	5.33	4.50	
知らない(C5)	7.71	4.66	

*P<.05; **P<.01; ***P<.001

(1)t 検定の結果，セックス経験者 (mean 4.47 SD4.49) と未経験者 (mean 6.04 SD 4.38) との間で有意差がみられ，未経験者の方が insecure なアタッチメント・スタイルを持つ者が多いことが明らかとなった(P<.001).

(2)t 検定の結果，初交時，相手とのセックスが合意ではなかった者 (mean 5.74 SD 4.69) の方が合意の上だった者 (mean 4.44 SD 4.68) より insecure なアタッチメント・スタイルを示すことが明らかとなった(P<.05).

(3)1 要因分散分析の結果，特定のパートナーを 1 人だけ持つ者 (mean 4.18 SD 4.44) と比べて，特定のパートナーが存在しない者 (mean 5.28 SD 4.48) の方が insecure なアタッチメント・スタイルを示す者が多い(P<.001).

(4)1 要因分散分析の結果，最近のセックスの頻度において，週に 1 度のセックスを経験する者 (mean 3.83 SD 4.37) にくらべ，全くセックスを行わない者 (mean 5.27 SD 4.52) の方が insecure なアタッチメント・スタイルを持つ者が多い (P<.01).

(5)t 検定の結果，中絶に対する意見において，「女性が望むのであればその女性一人の希望によって中絶しても良い」(mean 5.60 SD 4.83) という意見をもつ者は，この意見に反対する者 (mean 4.98 SD 4.38) より insecure なアタッチメント・スタイルを示すことが明らかとなった(P<. 01)

(6)1 要因分散分析の結果，援助交際についての意見は，「チャンスがあれば経験してみたい」(mean 6.35 SD 4.60) と考えている者の方が「認めるべきではない」(mean 4.71 SD 4.42) と考えている者より，insecure なアタッチメント・スタイルを示すことが明らかとなった(P<.05). また，「知っているが関心がない」(mean 5.33 SD 4.50) と答えた者も「認めるべきではない」と考えている者より insecure なアタッチメント・スタイルを持っていることが明らかとなった(P<.05).

D. 考察

男性においては，父親の豊かなケアが安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となることが明らかになった．また，母親の過干渉さがアタッチメント・スタイルを不安定なものにしてしまう可能性が示唆された．また，男性の場合，高 RD，高 SD，高 C，低 HA が安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となっているが，父親の過干渉が SD と C を低める方向に寄与していることから，父親の過干渉さは，直接アタッチメント・スタイルには影響しないものの息子の気質や性格に影響を及ぼし，ひいてはそれがアタッチメント・スタイルに影響することが予測できた．

次に，女性においては，父親と母親がともに豊かなケアを心がけることが安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となることが明かとなった．ただしその際，母親が過干渉になってしまっては逆にアタッチメント・スタイルを不安定なものにしてしまう．また，父親の豊かなケアは娘の温かな社交的友好関係(RD)や協調性(C)，全ては，ある全体の一部であるとする統合的な意識(ST)を高め，その結果この 3 つの性質は secure なアタッチメント・スタイルを形成する要素となっている．一方，母親の過干渉さは，娘が自らの意思で行動を統制しようとする力(SD)や他者との協調性(C)を低め，行動の抑制(HA)を高めている．アタッチメントと TCI の関係をみると，高 SD，高 C，高 RD，低 HA が secure なアタッチメント・スタイルを形成する要素となっていることから，母親の過干渉さが，娘のアタッチメント・スタイルを安定させる要素となりうる気質や性格に影響を及ぼし，その結果 insecure なアタッチメント・スタイルが形成されることが考えられる．

続いて，アタッチメント・スタイルが表現される心理的適応の一形態として取り上げた，性意識・性行動においては，安定したアタッチメント・スタイルをもつ者と，不安定なアタッチメント・スタイルをもつ者の間でいくつかの違いが示された．男女ともに，安定したアタッチメント・スタイルを持つ者は，青年期（あるいは青年期以前）に性交経験をもち，その後も特定のパートナーと安定した関係を保つことができている．一方不安定なアタッチメント・スタイルを持つ者には，性交経験のない者が多く，仮にあった場合でもその関係は継続的なものではないようである．もともとアタッチメント理論は生後間もない子どもと母親との母子関係から生じているが，青年期におけるアタッチメントの対象となりうる恋人との間でも，安定したアタッチメント・スタイルを持つ者のほうが，より親密で安定した関係を継続できるようであった．

E. 結論

4 年制大学に通う大学生を対象とし，アンケート調査を実施し，4,289 部の調査表を回収した．その結果，男性においては父親が豊かなケアを心がけ，母親があまり過干渉になりすぎないことが青年期においての安定したアタッチメント・スタイルの形成を促し，女性においては，父親のみではなく母親のケアも重要な要素であった．また，男性の場合，高 RD，高 SD，高 C，低 HA が安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となっているが，父親の過干渉さがこれを低める方向に寄与し，ひいてはそれがアタッチメント・スタイルに影響することが予測できた．一方女性の場合，高 SD，高 C，高 RD，低 HA が安定したアタッチメント・スタイルを形成する要因となっているが，母親の過干渉さがこれを低める方向に寄与し，ひいてはそれがアタッチメントを不安定なものにしてしまうことが予測できる．

続いて，アタッチメント・スタイルが表現される心理的適応の一形態として取り上げた，性意識・

性行動においては，安定したアタッチメント・スタイルを持つ者は，青年期におけるアタッチメントの対象となりうる恋人との間で，より親密で安定した関係を継続できるようである．

F．健康危険情報

なし

G．研究発表

なし

H．知的財産権の取得状況

1．特許取得
なし
2．実用新案登録
なし
3．その他
なし

文献

Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991).Attachment styles among young adults: a test of four-category model. *Journal of personality and Social Psychology 61, 226-244.*

Bowlby, J. (1958). The nature of the child's tie to his mother. International *Journal of Psycho-analysis 39, 350-373.*

Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds. I. Aetiology and psychopathology in the light of attachment theory. *British Journal of Psychiatry 130, 201-210.*

Cloninger, C. R., Svrakic, D. M., & Przybeck, T. R. (1993). A Psychobiological model of temperament and character. *Archives of General Psychiatry 50, 975-990.*

木島伸彦，斎藤令衣，竹内美香，吉野相英，大野裕，加藤元一郎，北村俊則 (1996). Cloninger の気質と性格の７次元モデルおよび日本語版 Temperament and character inventory (TCI). 精神科診断学 7, 379-399.

Kijima, N., Tanaka, E., Suzuki, N., Higuchi, H., & Kitamura, T. (2000). Reliability and validity of the Japanese Version of the temperament and character inventory. *Psychological Reports 86, 1050-1058.*

Kitamura, T., Kijima, N., Sakamoto, S., Tomoda, A., Suzuki, N., & Kazama, Y. (1999). Correlates of problem drinking among young Japanese women: personality and early experiences. *Comprehensive Psychiatry 40, 108– 114 .*

北村俊則 (1998). 現代の古典(28) Parker 仮説：児童期の養育体験はその後の精神疾患の発症危険要因か？精神科診断学 9, 565-568.

Parker, G., Tupling, H. & Brown L. B. (1979). A parental bonding instrument. *British Journal of Medical Psychology 52, 1-10.*

Parker, G. (1989). The parental bonding instrument: psychometric properties reviewed. *Psychiatric Development 7, 317-335*

Tomita, T., Aoyama, H., Kitamura, T., Sekiguchi, C., Murai, T. & Matsuda, T. (2000). Factor structure of psychobiological seven-factor model of personality: a model revision. *Personality and Individual Differences* 29, 709-727.

厚生科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）

研究協力報告書

Parental Bonding Instrument (PBI) の確認的因子分析による因子モデルの検討，および育児様式の世代間伝播について

研究協力者

宇治　雅代　熊本大学大学院医学薬学研究部環境社会医学専攻 環境生態学講座臨床行動科学分野

庄野　昌博　熊本大学大学院医学薬学研究部環境生命科学講座 公衆衛生医療科学分野

主任研究者

北村　俊則　熊本大学大学院医学薬学研究部環境社会医学専攻 環境生態学講座臨床行動科学分野

研究要旨

小中学生の子どもを持つ父親と母親，小学校5年生以上の小中学生に対し被養育体験を評価する Parental Bonding Instrument (PBI) の質問票を配布した．1571 世帯のうち 1529 世帯は小学校5年生から中学校3年生までの子どものいる家庭であり，残りの 42 世帯は小学校1年生から4年生までの子どものいる家庭であった．その探索的因子分析の結果と PBI の開発者 Parker ら(1979) の因子モデルとの相違点について検討した．養育する側の性別，養育される側の性別，養育される側の立場 (過去に養育されていた親の立場であるか，現在養育されている子供か) による違いを因子負荷プロットで検討した上で，それらを説明する因子構造モデルを作りその適合度を算出した．また個々の質問の因子負荷からそれらの質問の意味がどのように日本の文化の中で知覚されるのかを考察した．

作成された因子構造モデルは，養育する側の性別や養育される側の性別によって影響を受けただけではなく，養育を受ける側の世代が親であるか子どもであるかによって影響を受けるものであった．この理由について3つの可能性を考えた．つまり子どもが発達することで因子構造が変化していく可能性，時代とともに養育の性質が変化している可能性，親になることで被養育体験の知覚の様式が変わる可能性である．この3つの可能性についてどれが正しいのかを探求するために，親の世代，子どもの世代についてそれぞれ年齢が因子構造モデルにどのような影響を与えるかについても説明した．例えば子どもの発達的なものが因子構造に影響しているのであれば，子どもの年齢は因子構造に影響するが親の年齢は因子構造には影響しない．時代とともに養育が変化しているのであれば，子どもの年齢も親の年齢も因子構造に影響する．親になることで養育が変わるのであれば子どもの年齢は因子構造に影響を与えない．この結果，子どもの発達が因子構造に影響を与えていることが判明した．

さらに PBI の 2 因子について親の世代が自身の親から受けたと知覚している被養育体験としての PBI と，子どもの世代が親から現在受けている被養育体験としての PBI の値の間のピアソンの相関係数を算出することで，育児様式の世代間伝達について調べた．

A 背景

PBI は Parker ら(1979) によって開発され，過去の被養育体験を遡及的回顧する方法で評価されるものである．これは25項目からなる自己評価式尺度であり，各々の親に対して過去の知覚された被養育体験を遡及的回顧的に評価するものであり，Parker ら (1979) が 150 人の被験者に対して調査を行い，最終的に 2 因子からなると結論付けたものである．PBI は，過去の養育体験とその後の精神科的疾患の発症との因果関係についての研究においてこれまでに数多くの研究者によって使用されてきた尺度である．

さらには PBI の因子構造モデルに関しての議論 (Arrindel ら, 1989, Cubis ら, 1989, Derogatis ら, 1972, Gomez-Beneyto ら, 1993, Kazarian ら, 1987, Kendler ら, 1997, Mackinnon ら, 1993, Sato, ら, 1999, Murphy ら, 1997), 疾患の性質による回顧される被養育体験への影響, 知覚の歪曲 (竹内ら, 1989) など, PBI をめぐっては幾つかの議論がある. また因子構造に関しては文化的な要因もあるとされ, 一定の結論に至っていない状態である. また, 養育を受ける側の性別, 養育する側の性別がこの因子構造にどのように影響するのかは論じられてきていない. さらに PBI は本来は過去の被養育体験に対する自己記入式評価法であるが, この尺度が現在進行形の育児を受けている小中学生においては使用されうるのかどうかは未だ調査されていない.

今回の研究のもう一つの主要な目的である世代間伝達に関してはさまざまな観点から述べられてきている.

その第一の例として, 育児の様式は文化的にある世代から次の世代へ受け継がれていくと言われる (Whitening ら, 1988, Levinson, ら, 1980) . この中で文化とは宗教, 子どもや育児に関する概念や実行, ある特別な子どもに対する異なる価値判断などの要素からなるとされている. 文化は育児に対しては大きな威力を発揮し世代から世代へと伝承されるが, 決して静的なものではなく, 時代とともに変化していく.

第二の例として, 精神分析の領域ではフロイトは超自我が普遍的な価値の担い手として世代から世代へと規範を伝承していく役割をすると述べた.

第三の例として, Lebovici (1998) は世代間伝達を母子の幻想的相互作用状況に適用し, 親から受け継いだ想像の赤ん坊が世代的に伝達, 継承されて現在の赤ん坊にどんな風に投影されるかを明らかにした. 幻想の乳児は母親自身が乳幼児期, およびエディプス期に形成された内的な赤ん坊イメージ, さらには出生前に親の心の中に描かれていた赤ん坊イメージであるとされる. この視点が輪廻, もしくは世代間伝達と呼ばれるものである.

また阿闍世コンプレックス(小此木, 2001) と世代間伝達についても論じられている.

家族ライフサイクルの観点からは, Carter ら(1980) が, それぞれの家族の成員はそれぞれの世代特有の歴史を持っているが, そこには各世代の発達経験を次の世代に直接, または間接的に伝承する相互作用があると述べている. このような世代的な伝承, 継承は次々と各世代を介して続くが, 各家族成員はこれらの伝達内容を自己の中に内在化していく.

そして児童虐待の連鎖に関する研究, 論文は多く見られる. 1970 年以前は虐待の連鎖に関しての研究は, 直線的因果関係を探求するものであったり, 主要要因効果に関しての研究が盛んであったが, それ以降は虐待の連鎖は単純にひとつの観点, 理論では説明できないということが明らかになってきた.

虐待の連鎖を説明するのに Garbarino (1977) は後に Belsky (1980) によって発展された 'ecological model' を提唱した. これは, 個人的な要因 (ontogenic model), 家族要因 (microsystem model), 地域共同体要因 (exosystem model), 文化的要因 (macrosystem level) で説明しようとした. 他にも心理学的な理論として社会学習理論, アタッチメント理論や認知行動理論などさまざまな理論が使用されるようになった.

これまでの虐待の連鎖に関しての論文を見ると, 概して現在虐待をしている人はかつて虐待を受けていた可能性は高いが, 現在虐待を受けている子どもが将来虐待しやすい傾向があるとは言えないようである. もちろん, 虐待の連鎖の考え方に関しての賛否両論もある(Herman, 1992).

世代間伝達はこのようにさまざまな観点から延べられてきているが, 一般的な育児様式の世代間伝達について触れた論文, とくに PBI を用いての研究は数が少なく, さらにこういった研究が前述のいくつかの理論をどのように説明できるのか, 興味が持たれる. PBI を用いての世代間伝達に関しては, Kenneth ら(1996) が子どもを持つ双子の親としての養育態度の評価を 16 項目の PBI 短縮版を用いて, 養育様式は親の原家族から引き継がれた態度によって影響を受けるということを述べている.

我々は最後に PBI の再現性を調べるのであるが, それについては Parker ら (1983) が現在の抑うつによって, PBI の評価は変化しないとされている. また Kay (1990) らは 10 年間に及ぶ PBI の再現性について調査し一致率の高さを述べている. その他にも海外では多くの研究者が短期間, 中期間, 長期間の PBI の再現性を調査している(Gotlib ら 1988, Plantes ら 1988, Richman ら 1987, Warmer 1988). だがこの再現性に関する evidence はわが国では少ない.

B 研究目的

まず, 小中学生を子どもに持つ父母を対して調査した PBI に関して, 因子構造モデルを検討する. また過去の被養育体験でなく, 現在進行形の被養育体験に関して, 小中学生が知覚している被養育体験の因子構造を見て, 親の世代の PBI の因子構造と比較する. さらに育児される側および育児する側の性別, 年齢がこの因子構造モデルにどのように影響するかを解析する.

また個々の質問間の因子負荷量のばらつきを引き起こす言葉の意味を見出し, その背後にある生物学的, 文化的, 発達論的な考察をする.

さらに，PBI によって育児様式の世代間伝達を証明できるのかどうかについて調べる．

最後に PBI の再現性について検討する．

C 研究方法

対象者

小学校 5 年生から中学校 3 年生までの子どもとその両親 (1529 世帯), および小学校 1 年生から小学校 4 年生までの子どもの両親(42 世帯).

使用スケール

PBI を使用した．PBI は，1979 年に Parker らによって開発された 16 歳以前の父母それぞれからの被養育体験を care (養護) と overprotection (干渉) の 2 次元から回顧的遡及的に評価する尺度である．4 段階で回答する形式となっており，12 項目の care と 13 項目の overprotection からなる (表 1).

小学生，中学生を持つ親に，過去の自分自身の父母から受けた被養育体験を PBI の項目にそって記入していただいた．

小学校 5 年以上の小学生と中学生には，現在父母から受けている被養育体験を PBI の
項目にそって記入させた．

解析方法

統計解析には SPSS11.0 と Amos5.0 を使用した．

本来 PBI は 16 歳までの親との関係を振り返った上での自記式記入用紙であるため，親の世代が過去に受けた養育体験のデータについて本来の Parker ら (1979) と同様に因子数を 2 として探索的因子分析を試みた．一家に複数の子どもがいる場合に父母が二度以上回答している場合は一つを無作為に抽出した．またこの際に解析から排除されたデータと解析に際して使用したデータの間の一致率を調べる．PBI の再現性については，複数回回答しているサンプルが少なかったので，統計的解析は不可能であった．複数回回答したサンプルの数と，その中で一致した回答をした数を表示するにとどめた．

回答数は PBI の 25 個の項目のうち 23 個以上回答しているものを有効回答とした．

次に子どもの探索的因子分析を試み，親の結果との違いを検討する．親の場合と同様に，回答数は PBI の 25 個の項目のうち 23 個以上回答しているものを有効回答とした．

世代，養育を受ける側の性別や養育をする側の性別によってどのように因子負荷プロットが影響するのかを検討した．

それをもとに，世代，養育する側の性別や養育する側の性別を説明する因子構造モデルを作成し，潜在変数と観測変数の間の因果関係を示す因果係数 (causal coefficient) を計算し，goodness of fitness index (GFI), adjusted goodness of fitness index (AGFI), root mean square error of approximation (RMSEA) を用いてその適合度の指標とするものである．因果係数は，これは絶対値 0 から 1 の間の値をとり，0 だと観測変数と潜在変数の間の因果関係がなく絶対値が 1 に近づくにつれて因果関係が強くなるものである．GFI は 0 から 1 の値をとり 0.9 以上が適合度がよいとされる (Bentler, 1990) ．これらの指標はサンプルのサイズには影響されない利点がある．AGFI もやはり 0 から 1 の値をとり 0.8 以上が適合度がよいとされる (Cole, 1987, Cuttance, 1987). AGFI は GFI と異なり，自由度に左右されない．RMSEA は，0.10 以下であるとそのモデル適合度はよいということになる．また，モデル間の比較には赤池情報量基準 (AIC) を用いた．これはモデル間の相対評価をするもので，小さいほどよいモデルであるとされる．さらに年齢がこの因子構造モデルにどのように影響を与えるのかを親の世代，子どもの世代それぞれについて共分散構造分析を用いて調べ，与えるのであればそれは有意なものかについては，
AIC を指標として検討した．また，PBI の 2 因子について親の世代が自身の親から受けたと知覚している被養育体験としての PBI と，子どもの世代が親から現在受けている被養育体験としての PBI の値の間のピアソンの相関係数を算出することで，育児様式の世代間伝達について調べた．この場合，父と子ども，母と子どもの組み合わせにおいて両者ともに PBI の 25 個の質問のうち 23 個以上回答している組み合わせを有効回答として取り扱った．

1	暖かく優しい声で話しかけてくれる.	1	2	3	4
2	必要なほどには手助けしてくれない.				
3	好きなことをさせてくれる.				
4	私に対して冷たい.				
5	私が抱えている問題や悩みに理解を示してくれる.				
6	私に対して優しい.				
7	自分で意思決定をするのを好ましく思ってくれる.				
8	大人びてくるのを喜ばない.				
9	私がしようとすることを，総てにわたってコントロールしようとする.				
10	私のプライバシーを侵害する.				
11	私と色々なことをするのを楽しんでいる.				
12	よく私に微笑みかけてくれる.				
13	私を子ども扱いすることが多い.				
14	私が必要なことや望んでいることに理解を示さない.				
15	物ごとを私に任せてくれる.				
16	私に，自分は望まれていない子だと思わせる.				
17	精神的に不安定なときは，なだめてくれる.				
18	あまり私と喋らない.				
19	私を，父親に（母親に）頼らせようとする.				
20	父親（母親）がそばにいないと自分のことができない子だ，と私の事を考えている.				
21	できるかぎり自由にさせてくれる.				
22	好きなときに外出させてくれる.				
23	過保護だ.				
24	褒めてくれない.				
25	私に好きな服を着せてくれる.				

表 1：Parental Bonding Scale (PBI)

D 結果

有効回答数

有効回答者の数は，父親が自分の父親からかつて受けたと知覚している被養育体験 (Fgf) 596 人，父親が自分の父親からかつて受けたと知覚している被養育体験 (Fgm) 592 人，母親が自分の父親からかつて受けたと知覚している被養育体験 (Mgf) 776 人，母親が自分の母親からかつて受けたと知覚している被養育体験 (Mgm) 797 人，男児が現在父親から受けていると知覚している被養育体験 (CmaleF) 569 人，男児が現在母親から受けていると知覚している被養育体験 (CmaleM) 612 人，女児が現在父親から受けていると知覚している被養育体験 (CfemaleF) 610 人，女児が現在母親から受けていると知覚している被養育体験 (CfemaleM) 683 人であった.

また，世代間伝達の相関関係を求める際の，父子の組み合わせにおける有効回答数は 475 組，母子の関係における有効回答数は 621 組であった.

探索的因子分析の因子負荷プロット

小学生，中学生の子どもを持つ親の世代が過去の自分自身の親からの知覚された被養育体験を因子数を 2 とした場合の探索的因子分析を試みた. 図 1 に親の世代が自分の父親から受けた被養育体験 (PF) と，自分の母親から受けた被養育体験 (PM) をそれぞれ示す. さらに図 2 に小中学生の子どもを持つ父親が過去の自分の父母による被養育体験についての因子負荷プロット，図 3 に小中学生の子どもを持つ母親が過去の自分の父母による被養育体験についての因子負荷プロットを示す.

図 4，図 5，図 6 には，現在養育を受けている小中学生の因子数を 2 とした探索的因子分析の因子負荷プロットの結果を示した. 図 4 は，小中学生が現在父母から受けている知覚された被養育体験の因子負荷プロットであり，図 5 は男児，図 6 は女児に関して性別ごとに示したものである.

横軸の因子は care に相当するもので右に行くほど，care の要素が強くなり，左に行くほど無関心，拒絶の要素が強くなる.

縦軸の因子は overprotection に相当するもので，

上に行くほど overprotection の要素が強くなり，左に行くほど自律，独立の尊重の要素が強くなる．

本来，PBI は，16 歳までの過去の被養育体験を回顧して評価する尺度であるので，親の世代の因子負荷プロットと本来の Parker ら (1979) の因子負荷プロットを比較してみることにする．Parker ら (1979)の因子負荷プロットと異なる点は二点である．

一つは care と overprotection の間に負の相関が見られることである．Parker ら (1979)の論文では，この 2 因子間には相関はなく care の因子と overprotection の因子は完全に独立しているとされていたが，我々の解析ではこの 2 つの因子は強い相関を持ち(表 2，表 3)，特に小中学生の子どもを持つ母親が自分の母からの被養育体験を振り返った場合にはこの二つの因子の相関は－0.571 と最も高い値を示す．

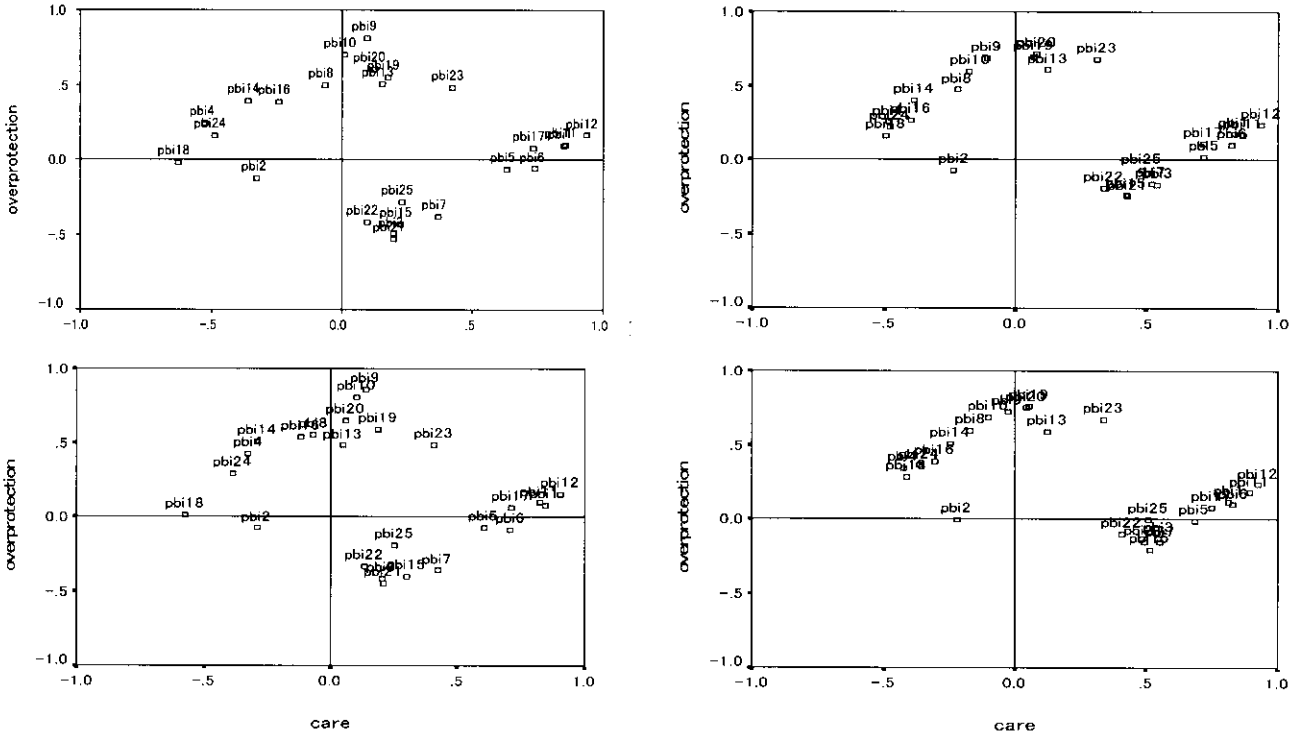
そして第二点目の相違点は，質問項目の中で本来は care に関する質問項目に入っていたものが overprotection への因子負荷量もかなり大きく，本来は overprotection の質問項目に入っていたものが care への因子負荷量も大きいというように，多くの質問項目が 2 つの因子どちらにも因子負荷量を持っていることである．

全体的な傾向を見ると，care の非逆転項目の質問 ‘暖かく優しい声で話しかけてくれる’ ‘私が抱えている問題や悩みに理解を示してくれる’ ‘’私に対して優しい’ ‘私といろいろな事を話すのを楽しんでいる’ ‘ よく私に微笑みかけてくれる’ ‘精神的に不安定なときはなだめてくれる’ に関しては本来の Parker らの論文と同じように care に対する因子負荷量が大きく overprotection に対しての因子負荷量は低いが，care の逆転項目の質問，つまり無関心や拒絶について尋ねる質問項目については ‘必要なほどには手助けしてくれない’ ‘私に対して冷たい’ ‘私が必要なことや望んでいることに，理解を示さない’ ‘私に，自分は望まれていない子だと思わせる’ ‘あまり私と喋らない’ ‘褒めてくれない’は care の概念だけでは説明できず，overprotection に対しての因子負荷量も多い．また overprotection の非逆転項目の質問 ‘大人びてくるのを喜ばない’ ‘’私がしようとする事を，全てにわたってコントロールしようとする’ ‘私のプライバシーを侵害する’ ‘私を子ども扱いすることが多い’ ‘私を父母に頼らせようとする’ ‘父母がそばにいないと自分のことができない子だ，と私の事を考えている’ ‘過保護だ’ に関しては本来の Parker らの論文と同じように overprotection の因子負荷量が大きく care に対しての因子負荷量は低いが，overprotection の逆転項目の質問，つまり自律，独立の尊重についてたずねる質問項目については ‘好きなことをさせてくれる’ ‘自分で意思決定するのを好ましく思ってくれる’ ‘物ごとを私に任せてくれる’ ‘できるかぎり自由にさせてくれる’ ‘好きなときに外出させてくれる’ ‘私が好きな服を着させてくれる’ overprotection だけではなく，care に対しての因子負荷量もかなり高い．このように逆転項目として扱われてきていた質問項目は実は純粋に意味的に逆転項目ではないことが判明した．

ただし，本来の Parker ら(1979) の論文に掲載されているのと同様に，今回の研究結果においても care の非逆転項目群，overprotection の非逆転項目群は，それぞれ overprotection，care の因子に対して因子負荷量が極めて低いという結果が出たにもかかわらず，今回は 2 つの因子はかなり強い負の相関を持っていることには留意しておかねばならない．

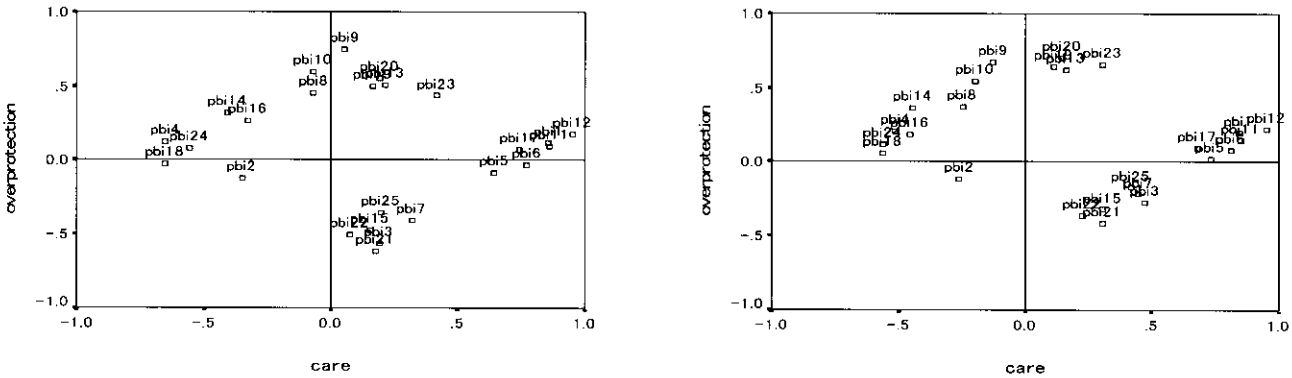
さらに同じ因子に関しての質問であっても，因子負荷プロットにはばらつきが見られ，意味づけの仕方は個々の質問内容によって微妙に異なるようである．

図 1: 親の世代が自分自身の父母から受けた被養育体験



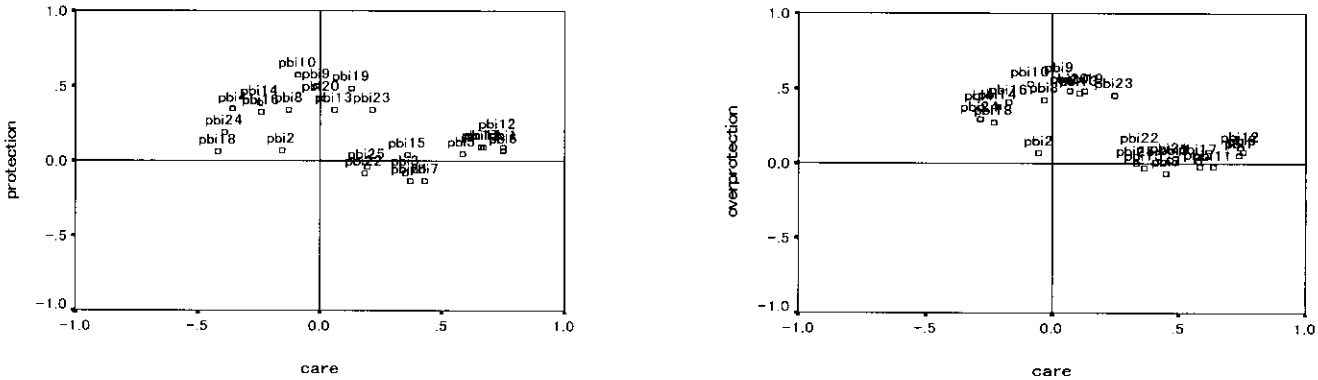
Fgf：父親が自分の父親から受けた被養育体験　　Fgm：父親が自分の母親から受けた被養育体験

図 3 母親が自分自身の父母から受けた被養育体験



Mgf：母親が自分父親から受けた被養育体験　　Mgm：母親が自分の母親から受けた被養育体験

図 4: 子どもが父母から現在受けている被養育体験



CF：子どもが現在父親から受けている被養育体験　　CM：子どもが現在母親から受けている被養育体験